

現代アメリカ小説研究-「ディアスポラ」の美学-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2009-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 越川, 芳明 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4095

現代アメリカ小説研究
——「ディアスポラ」の美学——

越 川 芳 明

— *Abstract* —

The Poetics of Diaspora in Contemporary American Border Writing

KOSHIKAWA Yoshiaki

A distinctive feature of border culture is diaspora, the history of displacement and wandering common to people on the margins. But border writing differs from traditional travel narratives, which as Ihab Hassan explains, “always codify the Other, and express fantasies of dominance over people and even landscapes.” Border writing speaks from “*el otro lado*,” the other side of the border, and speaks from the border perspective. Border writers, displaced from an “origin”—a home, a culture—are those who exploit nomadic tactics such as “deterritorialization” (as described by Deleuze and Guattari), shamanism, or magic realism to invent new identities as border crossers. Border writers create a new art transcending any single ethnicity, sexuality, race, or nationality, a new art which arises “from the ruins and ashes” of geopolitical, cultural, and spiritual exile.

What is a border? There are as many answers to this simple question as there are socio-political contexts in which the word is employed. This paper focuses on the geopolitical sense of borders as the dividing lines between nation-states, and specifically on the borderline between the United States and Mexico in its fullest historical and political context, including the history of friction and conflict surrounding the U. S. acquisition of California, Arizona, New Mexico, Nevada, Utah and some sections of other states under the Treaty of Guadalupe Hidalgo in 1848.

There have been numerous representations of the US and Mexican border region and its residents, but as David R. Maciel suggests in his pioneering study of border films, most Hollywood and Mexican commercial films have provided nothing but “stereotypical views of the border region.” The Mexicans of this region are mere objects in these films, portrayed as either villains, drunks, or social victims, with Mexican women in particular represented as either chaste virgins or prostitutes. “The portrayal of the border,” Maciel concludes, “is usually negative and superficial in nature” that is, lacking social reality because it does not grapple with the real issues of the border.

In contrast to commercial filmmakers, Chicana poet, essayist and activist Gloria Anzaldúa (b. 1942) is one of the few contemporary border artists who have written of the US and Mexican border culture deeply enough to reveal its complexity. Anzaldúa is an exemplary nomadic writer, speaking from the border of the two cultures to subvert both the patriarchy of traditional Chicano society and

the dominant mono-cultural ideology of Anglo America. Subscribing to neither her own mother's belief in the traditional mother/wife role of the Chicana woman, nor the American stereotype of the illegal Mexican "wetback," Anzaldúa embraces Indian, Mexican, and diverse world cultures to create a politics of "mestiza," a mixture of races. As a Spanish-speaking Chicana in English-speaking society, a woman of color in white America, and a queer in patriarchal Chicano society, Anzaldúa has reason to believe that she has been displaced in multiple ways; as far as she is concerned, the border does not simply divide two countries, but also signifies divisions of race, gender, sexuality, and class.

As Anzaldúa suggests, borders are the margins of society where we encounter "los atravesados," the border-crossers: "the squint eyes, the perverse, the queer, the troublesome, the mongrel, the mulatto, the half-breed, the half dead." Giving voice to a multitude of "los atravesados," Anzaldúa produces a poetics of displacement, and her multi-lingual, multi-cultural essays and poems are not necessarily confined to "Chicano literature." As Emily Hicks has suggested, "What makes border writing a world literature with a 'universal' appeal is its emphasis upon the multiplicity of languages within any single language."

《個人研究》

現代アメリカ小説研究 ——「ディアスポラ」の美学——

越 川 芳 明

文化的・言語的越境をめぐる個人的な問題

一九九八年から翌年にかけて、わたしはアメリカ合衆国西海岸の、メキシコとの国境の町サンディエゴで暮らした。サンディエゴに着いたときから、地元の新聞（『ユニオン・トリビューン』）には、国境を越えてやってくるメキシコ人たちの凄惨な死（冬から春にかけては雪山での凍死、夏は砂漠での餓死）のニュースが繰り返し載っていた。メキシコ人の移動の「違法性」や「無謀性」が強調される新聞の論調は、あくまでこちら側（アメリカ合衆国）の都合が反映されていて、向う側（移動者）の意見は読み取れなかった。死を賭けてまでも、どうして渡ってくるのか。「違法な」国境ごえを繰り返すメキシコ人や中南米人たちの切実な気持ちはわからなかった。

国境地帯を舞台にしたハリウッド映画を例にとっても、『ワイルド・バンチ』（69年、サム・ペキンパー監督）から、『ボーダー』（81年、トニー・リチャードソン監督、ジャック・ニコルソン主演）にいたるまで、メキシコ人男性を描く場合でも「暴力的」「酒好き」「女好き」といった、あまりにステレオタイプなイメージをなぞるか、メキシコ人女性に対しても「純潔な処女」か「売女」かといったおざなりな図式ですましているかで、要するに主体性を奪われたオブジェの粹を出ない。合衆国とメキシコの国境を舞台にしたりテーマにした映画の研究で、先駆的な部類に入るデイヴィッド・R・マシエルの著作によれば、アメリカ（ハリウッド）産であれ、メキシコ産であれ、大手の商業映画が描く国境地帯はどれも似ており、通念におもねった視点しか提供せず、社会的なリアリティに欠けるという。それらの映画では、「国境のイメージはネガティブであり、皮相的である」と。

アメリカ合衆国のポップカルチャー（テレビ番組、ポップミュージック、映画）の圧倒的な影響力のもとで育ってきたわたしの世代の者にとって、それらがもたらした視覚的、言語的情報やイメージは意識下に沈潜している。60年代初頭の日本のテレビ番組で、アメリカ製の番組がどれほどの影響力を持っていたか、次の文章が雄弁に語っている。「一九六一年（昭和三六年）は外国テレビフィルムがピークに達した年である。この年の10月現在、東京のテレビ局五局の七～十時の夜のプライムタイムはまさに外国製フィルムのオンパレードであった。六十分番組が一九本、三〇分番組が五三本

現代アメリカ小説研究——「ディアスポラ」の美学——

と一週間に七二本もある。その総時間は二七三〇分となり、夜の番組の三分の一はアメリカ製テレビフィルムに占領されていたことになる²たとえば、わたしにとってのアメリカ合衆国の原型的イメージは、少年時代（一番多感な小学校の中高学年のころ）にテレビで見た『ララミー牧場』や『ライフルマン』や『ボナンザ』らの西部劇の描く開拓時代の大西部³であり、白人中心の「古き良きアメリカ」であった。高校を卒業するまで、身近にひとりの外国人も存在せず、外国語をじかにしゃべった経験がない人間にとって、それらの娯楽映画の提供した情報は強烈な印象を残した。だから、後年、中央カリフォルニア、ネヴァダ州よりのローン・パインという田舎町を訪ねたとき、ある懐かしさというか、デジャヴュ感覚に襲われたものだった。そこは、かつてハリウッドのスタジオがこぞって西部劇製作のためにロケ地として用いた場所だったのだ。

しかしながら、わたしの無意識下にそれほどの影響をもたらしたそれらの番組に対して、わたしはいま一定のある距離をおかねばならない。というのも、それらの番組がけっして描こうとしなかったものが、アメリカ合衆国が建国以来抱えてきた「奴隸制」であり、そのそれらが生み出す「人種差別」であったからだ。それらの謳う「古き良きアメリカ」は、そうした現実の矛盾を隠蔽することで成り立つ神話であることがいまや判明している。そうであれば、いまわたし自身のなすべきことは、わたし自身のなかのアメ合衆国をめぐる「刷り込み」を自覚し、それをひとつずつ修正していく以外にないのではないか。

もちろん、これまでも英語に限界を感じたことはあったが、これほどまでに意識したことはなかった。英語だけをどんなにうまく駆使しても、おそらく英語を喋られない「向こう側の人」の思考や感情などわかるまい。結局は、向こう側の理屈を理解するには、向こう側の言葉に耳を傾け、向こう側の言葉を理解するしかないのではないか。わたしはスペイン語を学ぶことにした。学びはじめて、すぐにいい意味でのカルチャー・ショックを体験した。初級クラスとはいえ、あるときスペイン語で簡単な自己紹介をするという宿題を与えられた。どこの出身で、家族は何人で、といったごく一般的な自己紹介のほかに、わたしは「アメリカ文学」を勉強・研究しています、と一言つけ加えようとした。しかし、これまで日本語で「アメリカ文学」といっても、英語で「アメリカン・リテラチャー」といっても、まったく問題がなかったのに、それをスペイン語で「ラ・リテラチュラ・アメリカーナ」*la literatura americana* と、いい換えたとなん、誤解が生じることを指摘されたのだ。スペイン語で「アメリカ（ス）」といえは、南北両大陸のことであり、国の名ではない。まさか、あなたは南はパタゴニアから北はアラスカまでの文学を勉強しているわけではないでしょう？ といいたいかのように、メキシコ出身の若い女性教師は、「ラ・リテラチュラ・ノルテアメリカーナ（北米文学）」か、もっと厳密にいえは、「ラ・リテラチュラ・デ・エスタドス・ウニドス（合衆国の文学）」がいい、と教えてくれた。そして、あとでテキストのあるページを読むように付け加えた。

わたしが授業後に、そのページを開くと、「America アメリカ⁴という語を国名として独占使用するアメリカ合衆国に対する、ヒスパニック系の移民の苛立ちの芸術的な表出の一つとして、タイムズ・スクエアの広告塔を飾ったイルミネーションが載っていた。チリ出身の芸術家アルフレド・ジャーの創り出したそのイルミネーションは、最初合衆国の輪郭のなかに「これはアメリカではない」と

いう文字が英語で映し出され、次に横に大きく AMERICA という文字が浮かび、真ん中の R の文字が南北アメリカ大陸の形に変化する。このイルミネーションのメッセージは明らかで、テキストの説明にもあるように、「アメリカ」という語はアメリカ合衆国だけに属するのではなく、他の三十三カ国もまたアメリカの一部であり、そこに住む五億人の住民も自分たちをアメリカ人だと思っているということを訴えたいのだ。

それから、わたしは日本語でも、アメリカ合衆国を指す言葉としての「アメリカ」という一語を使えなくなってしまった。本来、大陸全体を指すべき言葉を単なる一国が自国を指し示す言葉として使うのは、傲慢以外の何ものでもない。まして、日本人がアメリカ英語の用法をそのまま日本語に移し変えて使うことは、アメリカ中心主義にたんに迎合することにならないだろうか⁵。以来、わたしは日本語でエッセイや評論文を書くときに、多少のためらいを感じながら、「USA」とか「アメリカ合衆国」という語を使っているが、文章の中でそこだけ浮き上がるような違和感というか、坐りのわるさを感じるの否めない。「アメリカに行った友人」といった方が、「アメリカ合衆国（または、USA）に行った友人」というより圧倒的に通りがいい。日本語の新聞やテレビ、ジャーナリズムが日々そうした用法を使っているからである。しかしながら、その「坐りのわるさ」こそがこれまでの素朴なアメリカ観に対する異議中立でだと感じるいま、日本語の文脈にびたっと収まらない、そのような居心地のわるさを簡単に捨ててはいけないという思いがある。だから、しばらく日本語の居心地のわるさと向いあって、なぜそうなのか、を考えてみたい。それが、このような文章を書くわたし自身の隠れたもくろみでもある。

「紀行文（トラベル・ライティング）」の誘惑と危険

本来、砂漠に住む遊牧民は、旱魃や日照りなどの気候条件によって移動を余儀なくされるというが、ノマド文学が問題とする移動もまた、単なる空間移動というより、外からの力によって強いられる移動を指す。一言でいえば、強いられる移動（displacement）がノマド文学の必要条件である。それは政治的、経済的な要因による移民、民族争いによって生じた難民、奴隷制のもたらした故郷喪失者など、まさしく地球規模の「移動」であり、国家・国民の境界を越える「越境」である。一方、特定社会の規範や偏見などにより、否応もなく周縁部に追いやられる外国人労働者、同性愛者、身体障害者などの移動も含まれる。

それらの移動は、むろん、やがて植民地主義と奴隷貿易を導くことになる15、16世紀のヨーロッパによる「未開の地」での探検・調査のための移動とも異なるし、本来的に19世紀ブルジョワジーの移動の形態を有する今世紀の個人旅行^{トラベル}とも異なる⁶。ひとつに、伝統的な探検者や旅行家には、未知の世界への好奇心だけでなく、未知の世界での体験を語らずにはおかない欲望がひそんでいる。かれ自身すぐれたトラベル・ライターである作家のポール・セルーは、トラベル・ライティングの誘惑について、次のようにいう。「旅行とは、消えゆく行為だ。地理上の一線を忘却に向かって、独り旅する……。ところが、旅行本はその逆である。独り旅の主は、意気揚々と帰還すると、旅の経験を大袈

現代アメリカ小説研究——「ディアスポラ」の美学——

姿に話したが。……その種の消失は、旅行には不可欠なのに、帰還して沈黙を守る者は、ほとんどいない』と。

さらに重要なことは、伝統的なトラベル・ライティングに権力との結びつきが見られることである。トラベル移動はけっして双方向的ではなく、経済的、軍事的優位に立つ側から劣勢の側へに行なわれる。ジム・フィリップは、紀行文がもっとも多く書かれ消費されるのは政治的・商業的優位にある者たちの社会であるとし、「その意味で、紀行文がヨーロッパ的産物であり、多少とも植民地主義の歴史とかかわっていたといえる」⁸という。その点では、19世紀イギリスの勇猛果敢な女性旅行者たちも例外ではない。たとえば、ロッキー山脈やペルシャ、中国や朝鮮、日本の奥地といった辺地を歩きまわったイザベラ・バードであれ、西アフリカを旅したメアリー・キングスリーであれ、彼女たちの書き残した貴重な紀行文献は、女性の探検家としての能力を低く見たヴィクトリア朝の男性中心主義に巧みに挑戦し、それを回避する戦術をとっている⁹。だが、問題なのは、彼女らのトラベル・ライティングもまた、欧米中心主義の思想からは逃れられず、メアリー・プラットのいうエキゾチックかつ人種差別的な「帝国主義の視線」¹⁰が刷り込まれてしまっているということだ。

とはいえ、わたしはすべてのトラベル・ライティングを悪者と見なして、切り捨てることはできない。われわれは時代の強者のイデオロギーに染まって、それと知らずにステレオタイプな思考をしがちである。すぐれたトラベル・ライターは、みずからに取りついた強靱な足かせ（たとえば「帝国主義の視線」）に気づいてもナイーブに放擲する振りをしたりしない。むしろそれを逆手にとって利用する、パラドキシカルな方法をそれぞれ開発している。それは他者を支配するためというより、むしろ自らの意識の変容のための手段である。

そのような方法意識は、「移動性」と並んでノマド文学にとって重要な要素である「批評性」とも通じ合う。ノマド文学の武器としての「方法」の詳細な論述は、のちに譲るとして、予告的に触れるだけにとどめるが、たとえば、時の権力者（性的、種族的、経済的な優越者）による「支配的言説（マスター・ディスコース）」のアイロニカルな使用、多重言語を使用した混血文体の創造、従来のモノカルチャー的な「アイデンティティ・ポリティックス」によらない複合的なパースペクティブの提示などが考えられる。ノマド文学の試金石は、それがいかなるボーダー・クロッシングを果たし、特定の言語に内在する規制・規律を越えていくことができるかどうか、ということになるだろう。

ノマドロロジー

ドゥルーズとガタリの『千のプラトー』で展開される問題系のひとつで、われわれの関心を引くのは、リゾームという概念である。ドゥルーズのいう、リゾームの特徴のなかでも、いまノマド文学の移動との関連で注目し得るのは、「多様性」（接続と異質性）である。つまり、リゾームのいかなる点も、他のどの点とも接続が可能であるという特徴であり、そこから外部との関係性が導きだされる。「リゾームには始まりも終点もない、いつも中間、もののあいだ、存在のあいだ、間奏曲 *intermezzo* なのだ。樹木は血統であるが、リゾームは同盟であり、もっぱら同盟に属する」¹¹

樹木という隠喩を用いた家系図とリゾームという隠喩に基づく関係性では、するどい対比をなす。樹木をイメージする直線的なパラダイムでは、中央に太い幹があり、そのわきに無数の枝が群がる形を連想するしかなく、したがって血族の正統（直系）に重きが置かれ、嫡子であることが尊重され、非正統（傍系）や混血が軽んじられる。起源と末裔といった考えにこだわる純血主義者、本質主義者のイデオロギーをうちに隠し持っている。一方、リゾームが築き上げる関係性は、ノマド的主体の移動と同じように、血縁（種族）によらずに、性別や国家や階級の境界をも越えて、新たな連携をめざす。しかし、このリゾームの関係性は、ドゥルーズとガタリによるノマドの概念と同様、両義的であり、創造的であると同時に破壊的、反権力的であると同時に専制的でもある。

たとえば、フランス領マルチニーク出身のエメ・セゼールに代表されるカリブ海の混血（クレオール）文学は、多文化主義を引き下げて、周縁から旧宗主国の文学、いや世界文学の可能性を押しひろげているが、ラファエル・コンフィアンやパトリック・シャモワゾーは、何世代にもわたる幾つもの民族の血の混濁を自らの力に鍛え直す脈を再発見し、「クレオール文学」の脈の歴史をたどっている。「五世紀にわたる『クレオール化』の現象をその到達点から振り返ってみると、じつはあらゆる文化と言われるものが、単独の起源から一本の木が繁茂するように成長してきたのではなく、多様なものの出会いと混濁のなかから生まれてきたのだということに、人びとが気づくようになった」¹²と、ふたりの著作の訳者は述べる。「多様なものの出会いと混濁のなか」から、さまざまな文学実験が行われ、たとえば、エメ・セゼールは、プルトンのシュルレアリスムとの出会いをへて、「フランス語の内側からの革命を考え、白人の言語の内部でニグロの言葉を語ろうとする」¹³。われわれはコンフィアンとシャモワゾーの著作から、セゼールに〈ネグリチュード〉の抵抗の叫びだけでなく、クレオール文学の語り（アフリカの口ごもりや沈黙）を見ることを学ぶ。それは人種の垣根を越えたりゾームの関係性を見いだすことに他ならない。

あるいは、生涯ノマディックな生活への憧憬を持ちつづけ、著作と行動において現代のノマドの可能性をさぐった真のノマド作家としてブルース・チャトウィンをおぼろげに忘れるわけにはいかない。かれは、ギリシャの哲人デオゲネスの言を引きながら、本来外敵から身を護るために人々が城壁に囲まれた限られた空間に住んでいながら、内部で諍いが絶えない状況が都市生活への嫌悪感を生むという逆説を紹介する。チャトウィンは、そうした古代ギリシャのデオゲネス的嫌悪のなかに「文化的土着主義」の始まり、すなわち、文明的な都市を捨て、自然と調和した簡素でアナーキックな生活への衝動の端緒を見る。チャトウィンは、「ノマドというもうひとつの選択肢」というエッセイ¹⁴のなかで、ヘロドトスや司馬遷をはじめとする歴史家の文献を利用しながら、紀元前に遡って北アジア、中央アジアのステップの遊牧民、北極圏のツンドラやタイガの遊牧民に注目する。そして、それらの遊牧民の特徴を抽出する。そのなかでも、いまノマド文学との関連で注目すべきは、次の特徴である。(1)移動を妨げる文明の贅品を嫌い、身軽であること。(2)敵からの逃亡・撤退も屈辱とはみなさないゲリラ戦法。(3)ノマド社会を精神的・宗教的にリードするシャーマニズムの存在。

上記の(1)に関しては多言を要すまい。自らの住む家（テント）でさえ、コンパクトでポータブルに持ち運べるものでなければならないからだ。ここで思い出されるのは、チャトウィンの友人に宛てた

現代アメリカ小説研究——「ディアスポラ」の美学——

手紙の言葉である。チャトウィンはいう。「ぼくのなかには旅立ちへの押さえがたい欲求と、渡り鳥が自分の巣に戻るような帰郷への思いがある。遊牧民にはこのような帰るべき自分の家はない。その代償として、彼らには変ることのない移動の道 *unalterable paths of migration* がある」¹⁵と。それは、単一の民族や性や階級への固執、あるいは単一の国家やシステムへの帰属を前提にした思想的に対抗する移民者・越境者のパラダイムと捉えることができる。

また、(2)に関して、チャトウィンは、「逃走」を戦いの常道をはぐらかす遊牧民の戦法とみなす。たとえば、紀元前5世紀に、黒海・カスピ海周辺を根城にするスキタイ人（遊牧民）は、アケメネス朝ペルシャのダレイオス王の軍勢に攻め込まれロシアじゅうを逃げまわり、結局、敵の軍勢を撤退に追い込む。チャトウィンは、このダレイオスの撤退にナポレオンの撤退を重ね合わせ、さらにスキタイ人のゲリラ的逃走に毛沢東の戦略を重ね合わせる。

さらに、(3)のシャーマニズムに関して、現代の心理療法に通じるものを見る者、他の部族民よりすぐれた認識能力をシャーマンに見る者、より組織的な宗教の原始形態をシャーマニズムに見る者などがあるなかで、チャトウィンはミカエル・エリアーデに準拠して、シャーマニズムを遊牧民たちの宗教的なイデオロギーと定義する。つまり、もともとシベリアのトゥングース族（語）に由来するといわれるシャーマンは、狩猟民たちの癒しや占いの目的のために、魔術や呪術をつかう者であった。中央アジアのステップ、北アメリカ、オセアニアといった地域に、いろいろな形態のシャーマニズムが見られたが、いずれも活字による情報や記憶の蓄積ではなく、口承伝達を重んじていたという点が興味深い。つまり、部族の存続にとって重要な獲物の在処、敵の位置、防衛の手段などを語り継ぐ語り部の存在が最重要視される社会であったということである。シャーマンは、一言でいえば、眼に見える世界（生者の世界）と眼に見えない世界（死者の世界）にあいだに介在する霊媒にほかならず、死者の声を生きている者たちに伝える語り部とみなすことができる。また、シャーマンは、薬物やビートの効いた音楽や踊りの助けを借りて、たやすくトランス状態に入り、生と死の境界、肉体と魂の境界を越えていく、と信じられている。

チャトウィンによれば、現代において人間が放浪に出る動機は、「経済的なもの」と「神経症的なもの」のふたつだという。現代人を虫食んでいるのは、後者であり、「たとえば、世界中の名だたる保養地で開かれるパーティーをジェット機で梯子しているような連中は神経症的である」¹⁶。チャトウィンは、かれ自身の旅への衝動が「神経症的」であることを隠さない。それが遊牧民への関心の端緒となったものであるからだ。ただし、そうした移動が「文明人」の側に価値転換をもたらさないかぎり、ノマド文学の移動とは無縁だといわざるを得ない。チャトウィンは断ずる。「過ぎ行く文明を平常心で眺めていられるのが、真の遊牧民だ」¹⁷と。

チャトウィンの『パタゴニア』（1977）は、数多くあるトラベル・ライティングの中でも、自らの世界観・文明観を辺境の大自然に投影して、勝手な傲慢主義に陥っていない希少な例のひとつである。チャトウィンは、『パタゴニア』という言葉の響きが……『地の果て』の代名詞として、西洋人の想像力を掻き立ててきた」その「文化的植民地主義」の歴史を知っており、ヨーロッパの先人たち（文学者、科学者）の例に倣うことはない。むしろ、かれはパタゴニアという土地に、その土地に

住む人間に、その歴史を語らせようとする。そうした姿勢は、文化帝国主義とはベクトルが正反対である。そこには、侵略者としての旅人が大自然の言葉を代弁してやるといった奢りはまったくなく、むしろ自己をかぎりなく小さくして、大自然自体に語らせようとする姿勢しかない。それでこそ、「発見」が光をはなつ。ただの不毛の土地と見なされたパタゴニアそれ自体の豊饒さが見えてくる。

詩人の指がぼくの腕をつかんだ。詩人は熱く輝く視線をぼくに向けた。

「パタゴニアか!」と、詩人は叫んだ。「したたかな女主人だぞ。こいつはのろいをかける。魔法使いだ。おまえをはがいじめにして、絶対に離さないぞ」

雨がブリキの屋根を激しく打った。それから二時間というもの、詩人はぼくのパタゴニアになった¹⁸。

チャトウィンこそは自らの教養をはぐくんだ西洋文明から身軽く逃走するフットワークと、向う側にあるもう一つの文明を見透すシャーマンの眼力を有した数少ないノマド文学者のひとりだった。

グロリア・アンサルデュアのボーダー詩

グロリア・アンサルデュアは、ギレルモ・ゴメス・ペーニャと並ぶすぐれたメキシコ系アメリカ人である。彼女は、アメリカ合衆国とメキシコの国境にまたがる文化衝突、チカノ文化における性の抑圧、アメリカ社会における有色女性の抑圧といった諸問題を自らの体験から語るだけでなく、斬新な方法意識によって芸術にまで昇華させた希有な詩人である。彼女は、1942年にテキサス州南部のヘサス・マリアの牧場で生まれた。四、五世帯の家族が集まって集落をつくるような小さな共同体で、いわば伝統的なチカノ社会のなかで育った。つまり、子どもたちは親の仕事を手伝うこと、とりわけ、女の子は料理、掃除、裁縫などを母親の片腕になってすべきで、読書などは「怠惰な人間」のすることだ、といった典型的な労働者階級のエシクが支配していた。後年、彼女はカムアウトして、レスビアンであることを公言するが、母親は彼女が自分のコミュニティでそのことを言いふらすことも、女友達を連れてくることも許さなかったという。アンサルデュアは、長じて大学と大学院に進むが、その前に、女性の教育を「怠惰」と見なすような、自らのオリジンであるチカノ社会の伝統的な価値観と衝突しそれを克服しなければならなかった。さらには、メキシコ系アメリカ人がともすれば触れたがらない「インディオ」の血や文化を積極的に自らのアイデンティティの根幹に据えているところも、チカノ社会のステレオタイプを逃れている彼女の詩と思想の特性のひとつとすることができる。

アンサルデュアの詩は、国境地帯の二重の文化、二重の言語の問題を混血（メスティサ）の方法意識によって、扱ったものと見なすことができる。ふたつの文化、ふたつの言語に引き裂かれる者が直面する政治、経済、社会的現実、たとえば、1848年に締結されたグアダルペ・イラルゴ条約などに

現代アメリカ小説研究——「ディアスポラ」の美学——

見られる歴史の諸条件によって生じる社会矛盾やその矛盾に翻弄される人間の苦悩がテーマとなっている。以下にとりあげるふたつの詩は、国境地帯の民族差、階級差といった社会問題をふたつの異なる視点(パースペクティヴ)から扱い、対照的な効果を生じさせている。参考までに、対訳を試みた。

“White-wing Season”¹⁹

The whitemen with their guns
 have come again
 to fill the silence and the sky
 with buckshot.

She shakes out the wrinkles
 snapping the sheets,
 they crack like thunder
 lean on the wind.

The *gringos* pull their caps
 down to their eyes
 hand her the bills,
 the green flutter in her hand
 will reshingle her roof.

Once her tender arms raised up
 her brother's rifle
 pointed at the cooing sounds
 sprigs and two feathers floated down
 near her feet twitching plumage
 translucent eyelids blinking
 across its eye
 the small opened bill
 blood from its mouth

She pours blueing into the washtub
 plunges her arms in
 puncturing the sky.

She wrings the *sábanas*
 they sail and snap in the wind.
 Startled, plump bodies rise
 from the wooded areas and desert brush.
 The beating of feathers
 white patches on wings and trail.
 The shots
 feathers fall over the fields
 cover her roof.

On their way back
 to the midwest
 the hunters drop two birds
 on her washboard.

Her eyes shiny pellets
 watching the wind
 trying to lift their wings.
 Tinges of pink
 small twisted necks
 line the furrows.

She dunks the doves in the boiling pot
 plucks out the feathers

in her belly a rumble
 the sky reddens then blackens
 a flurry of night rain
 gentle as feathers.

(試訳)

ハジロ鳩の季節

銃を手にした白人たちが
 ふたたびやってきた

現代アメリカ小説研究——「ディアスポラ」の美学——

鹿弾で沈黙と空を

破る

彼女がシーツを振って
皺をのばし力いっぱいはたくと
雷のような音がして
風になびく

グリーンゴたちは野球帽を

目深にかぶり

彼女に紙幣を手渡す

彼女の手の中ではためく緑のドル札は

屋根の普請に消えるだろう

彼女のやわらかな両腕が
弟のライフルをとりあげ
クウクウとやさしく鳴く声に向けたことがあった
小枝と二本の羽根がひらひら舞い落ち
彼女のそばにはのたうつ羽毛の小動物
半透明の目ぶたが
閉じたり開いたりしていた
小さな開いた嘴
その口から血が流れでた

彼女は青味剤を洗いおけに流し込み

両腕を突っ込む

大空をパンクさせながら。
彼女は布地^{シバネ}を絞る
それらは風にそよぎ、ぴしゃっと音がする。
驚いて、まるまると太った体がぬくっと立ちあがる
林の中から、砂漠のブラッシュの中から。

羽根をばたつかせ
翼と尾に白い斑
銃弾の音
羽根が野原におち

屋根をおおう

中西部に帰る

その前に

猟師たちは洗濯板の上に

二羽の鳥を投げた。

彼女の目は輝く小球

風の動きを見まもり

翼を持ちあげようとする。

うっすらとピンク色

捻じった小さな首のあたり

畔のような筋ができています。

彼女は野鳩を煮立ったお湯の中に入れ

羽根をむしり取る

腹がぐうぐういっている

空が真っ赤に染まりそれから真っ暗になる

突然やってきた夜の雨

鳥の羽根のようにおだやかに。

“We Call Them Greasers”²⁰

I found them here when I came.

They were growing corn in their small *ranchos*

raising cattle, horses

smelling of woodsmoke and sweat.

They knew their betters:

took off their hats

placed them over their hearts,

lowered their eyes in my presence.

Weren't interested in bettering themselves,

why they didn't even own the land but shared it.

現代アメリカ小説研究——「ディアスポラ」の美学——

Wasn't hard to drive them off,
 cowards, they were, no backbone.
 I showed 'em a piece of paper with some writing
 tole 'em they owed taxes
 had to pay right away or be gone by *mañana*.
 By the time me and my men had waved
 that same piece of paper to all the families
 it was all frayed at the ends.

Some loaded their chickens children wives and pigs
 into rickety wagons, pans and tools dangling
 clanging from all sides.
 Couldn't take their cattle -
 during the night my boys had frightened them off.
 Oh, there were a few troublemakers
 who claimed we were the intruders.
 Some even had land grants
 and appealed to the courts.
 It was a laughing stock
 them not even knowing English.
 Still some refused to budge,
 even after we burned them out.
 And the women—well I remember one in particular.

She lay under me whimpering.
 I plowed into her hard
 kept thrusting and thrusting
 felt him watching from the mesquite tree
 heard him keening like a wild animal
 in that instant I felt such contempt for her
 round face and beady black eyes like an Indian's.
 Afterward I sat on her face until
 her arms stopped flailing,
 didn't want to waste a bullet on her.
 The boys wouldn't look me in the eyes.

I walked up to where I had tied her man to the tree
and spat in his face. Lynch him, I told the boys.

(試訳)

こきたねえヤツラ

おれがここにやってくると、ヤツラがいた。
ちっぽけなランチョでとうもろこしを作ったり
家畜や馬を育てたりしてた
薪の煙の臭いや汗の臭いがぷんぷんしてやがった。
自分より偉い人間のことはわかると見えて
やっこさんたち、つば広の帽子をとって
胸にあてて
おれの前で視線をおとした。

もっとマシな生活がしたいといった気概もなく
土地を自分のモノにしないで、みんなで共有していた。
連中を追いだすのなんざ、朝飯前だった
臆病者で、根性なしときてるから。
なんか小難しいことが書いてある書類を一枚見せて
連中にいってやった、税金を立て替えてあるんだ
直ちに払え、払えなきゃ、マニャーナまでに出ていけ。
おれとおれの手下の連中がすべての家族にその紙切れを
これみよがしに見せているうちに、すっかり端が
擦り切れてしまったっけ。

ある者は鶏や子どもや女房や豚をオンボロトラックに積み込んで
鍋とか道具もほうぼうにぶらさがっていた。
馬は連れていけなかったな——
夜中のうちにうちの連中が馬を脅して逃がしていたからだ。
そうそう、なかには面倒を起こすヤツもいて
おれたたちのことを侵略者だとぬかしやがった。
不動産の証書を持っているヤツもいて
そいつらは裁判所に訴えたりもした。
お笑いぐさじゃないか

現代アメリカ小説研究——「ディアスポラ」の美学——

英語すらしゃべれないくせして。
 そいつらの家を焼き払ったにもかかわらず
 がんとして譲らないヤツもいた。
 それと女どもだ—とりわけ、ひとりの女だけはよく覚えてるさ。

その女はおれの体の下でべそをかいてた。
 おれは自分の一物ではげしく耕し
 なんどもぐりぐり突いてやった
 メスキートの木の下から男が見てたっけ
 そいつが野生動物みたいに号泣する声が聞こえてきた
 その瞬間ふとおれはその女が煙たくなった
 まるい顔にビーズのような黒い目で、インディアンのようなようだった。
 おれは女の顔の上に尻をのつけて
 女が抵抗するのをやめるまで動かなかった
 銃弾をこんな女のために無駄にしたくなかったからな。
 手下の連中はおれと目を合そうとはしなかった。
 おれは女の亭主を縛りつけておいた木のところまで行って
 そいつの顔につばを吐いてやった。やつを縛り首にしてやれ、
 おれは手下の者どもに言った。

註

- 1 David R. Maciel, *El Norte: The U.S.-Mexican Border in Contemporary Cinema* (San Diego: San Diego State University, 1990) 4-5. マシエルが否定的に論じている比較的最近のハリウッド産のボーダー映画として、その他に、国境警備隊員と密入国者をカモにするメキシコの組織との戦いを描く『ボーダーライン Borderline』(80年, ジェラルド・フリードマン監督, チャールズ・ブロンソン主演), 国境警備にあたるテキサス・レンジャーとメキシコの麻薬密輸一味の争いを描くアクション映画『ダブル・ボーダー Extreme Prejudice』(87年, ウォーター・ヒル監督, ニック・ノルティ主演), 合衆国に奪われたアラモ砦をエキセントリックな將軍の率いるメキシコの軍勢が奪還を試みる「良質のコメディとも良質の諷刺劇ともいえない」映画 *Viva Max* (69年, ジェリー・パリス監督, ピーター・ユスチノフ主演), メキシコの田舎の村を襲う悪党一味を、村人たちに本物のガンマンと勘違いされた三人の役者たちがやっつけるコメディ『サボテン・ブラザーズ Three Amigos』(86年, ジョン・ランディス監督, チェヴィ・チェイス, スティーヴ・マーティン主演) などがある。
- 2 乾 直明『外国テレビフィル盛衰史』1990年, 晶文社, 134頁。
- 3 *The Complete Directory to Prime Time Network TV Shows 1946-Present* (New York: Ballantine, 1988) によれば, “Laramie” (『ララミー牧場』) はNBCによる一時間番組で, 1959年9月から1963年9月まで放映されたという。1870年代のワイオミングを舞台に, 父を土地強盗に銃殺されたふたりの若い兄弟が残された牧場を懸命に守るという物語。日本では, 1960年6月に放送開始。一方, “The Rifleman” (『ライフルマン』) は, ABCによる30分番組で, 1958年9月から1963年1月まで続いた。ニューメキシコの小さな町を舞台に, ホー

ムステッダーの男とその息子の苦闘を描いたもの。主人公は改造マンチェスターを華麗に操り、無能の保安官に成り代わって、町にやってくる悪漢どもをやっつける。日本では、1960年11月に放送開始。また、“Bonanza” (『ボナンザ』) は、NBCによる一時間番組で、1959年9月から1973年1月まで続いた長寿番組。南北戦争時代のネヴァダ州の田舎町を舞台に、富裕な大農場主の男と三人の息子たち（全員、母親がちがう）の繰り広げる性格劇。通常の西部劇とちがい、暴力（撃ち合い）よりも人間関係や葛藤のほうに描写の力点があり、人気を博し、とくに64年から67年までトップの人気を誇った。日本での放映は1960年7月から。

- 4 *Random House Dictionary of the English Language* には、“America” (名詞) の項目があり、意味の説明は順番に次の通り。(1)「合衆国」の項目を見よ。(2)北米の項目を見よ。(3)南米の項目を見よ。(4)南北アメリカを統一的に見て、the Americas と呼ばれる。また、*Webster's Third New International Dictionary* には、“america” を形容詞 (「通常、大文字で始める」との但し書き付き) として扱い、その意味として二通りの意味を挙げている。(1)北アメリカあるいは南アメリカに関係する。(2)合衆国に関係する。尚、形容詞 “American” でも、その定義はそれぞれの辞書の “America” の定義に準じている。
- 5 文化人類学者の今福龍太は、アメリカ合衆国による「アメリカ」という語の独占使用に対する対抗手段として、「アメリカ」の複数形、すなわち「アメリカス Americas」という概念を持ち出す。この「複数のアメリカ」という概念が大前提としているのは、今福によれば、「…これが北米=アングロ・アメリカによって独占されたかの感がある『アメリカ』という概念に、汎大陸的、西半球全域的な包括性と、歴史・民族的多元性を与え直そうとする意志に貫かれている点である。…… (中略) 別の言い方をすれば、それはアングロ系白人種によって統治された近代国家としての『純血のアメリカ』(合衆国)の唯一の理念にたいして、ヨーロッパ、アフリカ、先住民インディオを統合する『混血のアメリカ』を突きつけることでもある」(『ちくま』1998年5月号, 20頁)。
- 6 ポール・フッセルは、探検をルネッサンスの時代に属するもの、トラベル (個人旅行) をブルジョワ時代に属するもの、ツーリズム (団体旅行) を現代のプロレタリア時代に属するものと規定している。Alison Blunt, *Travel, Gender, Imperialism* (New York: The Guilford Press, 1994) 19.
- 7 Paul Theroux, *The Old Patagonian Express by Train Through the Americas* (London: Hamish Hamilton, 1979) 11.
- 8 Jim Phillip, “Reading Travel Writing,” *Recasting the World: Writing After Colonialism*, ed. Jonathan White (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1993) 242.
- 9 メアリー・キングスレーの西アフリカ旅行および彼女の旅行記について論じたアリソン・ブラントによれば、キングスレーは「植民地政権に批判的で、土着の風習を理解し、貿易商人は政策への影響力を持つべきであると論じ、またキリスト教の伝道を批判し、酒の交易を支持し、一夫多妻制やカニバリズムといったタブーのテーマをアフリカ的な文脈で捉えようと試みた」という。(Alison Blunt 53-54)
- 10 とはいえ、キングスレーの次の文章には、明らかに「帝国主義の視線」を見て取れる。「わたくしは、白人種が黒人たちを文明という山脈の頂上へと引き上げることはできないと信じます。一夫多妻制も奴隷制も、ともに……アフリカの安寧には必要不可欠です——ともかく、農業を営むこの巨大な地域にとって、このふたつの制度はアフリカ人がかれ自身の頂点をもつために必要です。ただ、熱心な改革家にとって残念なことに、アフリカ人は文明という峰への山登りを望んでいません。(中略) たとえかれ (アフリカ人) が自己犠牲的な宗教という、より高い山地へ引きあげられたとしても、6割が転げ落ちて傷つき、道徳的に不具者となり、もとの沼地へと逆戻りすることになるのです」(Alison Blunt 95) 同様に、ロッキー山脈をめぐる自然観察、人間観察ですぐれた文章を残したイザベラ・バードでさえも、次のような人種差別をめぐる刷り込みを逃れなかった。「前の四台の車両デッキには女と子供を連れ、仕事道具を持ったディガー・インディアンが群がり乗っているのですが、これが原始的で文明のかけらもない野蛮そのもので、まったく品格というものがなく、白人が来る前にいずれ絶滅の運命にあるのではないかと思わせるような種族なのです」(『ロッキー山脈踏破行』17頁)
- 11 ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトーン——資本主義と分裂症』(宇野邦一他訳、河出書

現代アメリカ小説研究——「ディアスポラ」の美学——

- 房新社, 1994年) 78頁。
- 12 パトリック・シャモワゾー, ラファエル・コンフィアン『クレオールとは何か』(西谷 修訳, 平凡社, 1995年) 訳者まえがき13頁。
 - 13 同掲書182頁。
 - 14 Bruce Chatwin, "The Nomadic Alternative," *Anatomy of Restlessness: Selected Writings 1969-1989*, eds. Jan Borm and Matthew Graves (New York: Viking, 1996) 85-99.
 - 15 Bruce Chatwin, "Letter to Tom Maschler," *Anatomy of Restlessness: Selected Writings 1969-1989*, eds. Jan Borm and Matthew Graves (New York: Viking, 1996) 76.
 - 16 "Letter to Tom Maschler," 83.
 - 17 "Letter to Tom Maschler," 83.
 - 18 Bruce Chatwin, *In Patagonia* (New York: Penguin, 1988) 29.
 - 19 Gloria Anzaldúa, *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza* (San Francisco: Spinsters/Aunt Lute, 1987) 101-103.
 - 20 Gloria Anzaldúa, 134-135.

Selected Bibliography

- Anzaldúa, Gloria. *Borderlands/La Frontera: The New Mestiza*. San Francisco: Spinsters/Aunt Lute, 1987.
- Blunt, Alison. *Travel, Gender, and Imperialism: Mary Kingsley and West Africa*. New York: The Guilford Press, 1994.
- Chatwin, Bruce. In Patagonia. New York: Summit Books, 1977; Reprint, New York: Penguin, 1988.
- . *Anatomy of Restlessness: Selected Writings 1969–1989*. Eds. Jan Borm and Matthew Graves. New York: Viking, 1996.
- Gómsz-Peña, Guillermo. *Warrior for Gringostroika: Essays, Performance Texts, and Poetry*. Intro. Roger Bartra. Saint Paul: Graywolf Press, 1993.
- . *The New World Border: Prophecies. Poems and Loqueras for the End of the Century*. San Francisco: City Lights, 1995.
- Hassan, Ihab. *Selves at Risk: Patterns of Quest in Contemporary American Letters*. Madison: University of Wisconsin Press, 1990.
- Hicks, Emily. *Border Writing: The Multidimensional Text*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 1991.
- Kaplan, Caren. *Questions of Travel: Postmodern Discourses of Displacement*. Durham: Duke University Press, 1996.
- Maciel, David R. *El Norte: The U.S.-Mexican Border in Contemporary Cinema*. San Diego: San Diego State University, 1990.
- Philip, Jim. "Reading Travel Writing." *Recasting the World: Writing After Colonialism*. Ed. Jonathan White. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1993.
- Said, Edward W. *Identity, Authority, and Freedom: The Potentate and the Traveller*. Cape Town: University of Cape Town, 1991.
- Sobek, María Herrera. "Death of an Immigrant" *Borderland Literature*. Eds. Harry Polkinhorn et al. San Diego: Institute for Regional Studies of the Californias, San Diego State University, 1990, 145–166.
- Theroux Paul. *The Old Patagonian Express by Train Through the Americas*. London: Hamish Hamilton, 1979.

(日本語)

- 乾 直明『外国テレビフィルム盛衰史』(晶文社, 1990年)
- 今福龍太『移り住む魂たち』(中央公論社, 1993年)
- 「シェイクスピアとアメリカス」(『ちくま』1998年4月号～1999年11月号)
- 今福龍太・沼野充義・四方田犬彦編『旅のはざま』(世界文学のフロンティア1)(岩波書店, 1996年)
- 篠原資明『ドゥルーズ—ノマドロジー』(講談社, 1997年)
- パトリック・シャモワゾー, ラファエル・コンフィアン『クレオールとは何か』(西谷 修訳, 平凡社, 1995年)
- ブルース・チャトウィン『パタゴニア』(芦沢高志, 芦沢真理子訳, めるくまーる社, 1990年)
- 「ノマドという可能性——トム・マシュラーへの手紙」(宮田和樹訳, 『10+1』, 1997年8月号, 94–101頁)
- ブルース・チャトウィン, ポール・セルー『パタゴニアふたたび』(池田栄一訳, 白水社, 1993年)
- シル・ドゥルーズ, フェリックス・ガタリ『千のプラトー——資本主義と分裂症』(宇野邦一他訳, 河出書房新社, 1994年)
- イーハブ・ハッサン『おのれを賭して——現代アメリカ文学における探究の諸形態』(八木敏雄ほか訳, 研究社出版, 1995年)

(こしがわ・よしあき 文学部教授)